

# GSI Newsletter

G S J ニ ュ ー ス レ タ ー No. 26 2006/11

## Contents

水文学的・地球化学的手法による  
地震予知研究についての  
第5回日台国際ワークショップ報告

第1回「震災対策技術展/自然災害対策技術展」宮城でのブース出展報告

地質調査総合センター第6回シンポジウム  
「地質情報の社会貢献を考える」

「人類と社会の未来をつなぐ地質時代  
—日本の第四紀研究50年—」  
地質標本館2006年度秋季特別展を開催して

第3回自治体—産総研地質地盤情報連絡会  
開催

地質標本館2006年度野外観察会  
笠間市周辺の岩石と鉱物  
—稲田花こう岩採石場と桂村の珪化木—

地質地盤情報協議会第4回意見交換会

サイエンスカフェ裏話

新人紹介

スケジュール

編集後記

## 水文学的・地球化学的手法による地震予知研究についての 第5回日台国際ワークショップ報告

小泉 尚嗣 (地質情報研究部門)

### 1. はじめに

2006年10月10日～12日に標記ワークショップが、産総研地質調査総合センターと成功大学防災研究センターとの共同研究である「台湾における水文学的・地球化学的手法による地震予知研究」の一環として、つくば中央第7事業所他にて開催された。10月10日にワークショップ、11日～12日には静岡県御前崎市周辺への巡検が行われたが、ここでは10日のワークショップについて主に報告する。参加者は約30名であった(写真1, 2)。

### 2. ワークショップの概要

主催者を代表して、産総研の佃 栄吉研究コーディネータ(地質担当)が最初に挨拶を行った。引き続き午前と午後のセッションにわけて表に示す内容で発表と質疑応答があった。

### 3. 感想等

台湾における地震に伴う地下水・地下ガスの変化に関する組織的な研究は、2001年からスタートし2005年に第1ステージを終え、2006年から4ヵ年計画で第2ステージが始まっている。産総研は2001年の研究スタート時から協力を行ってきた。2001～2005年が日本と台湾でのこの分野における知識と技術の共有のステージであったとすれば、次の4年間は、ともに手を携えてこの分野の研究発展を図るステージである(小泉, 2005)。メカニズム解析からいうと、従来の静的な地震時体積歪変化のみの見積もりに基づく地震時地下水変化の評価から、液状化や透水性の変化も考慮したダイナミックな解析を行っていく必要がある。また、谷川氏や加納氏の発表にあるように、困難では

表：ワークショッププログラム

10:00	佃 栄吉 (GSJ 代表, 研究コーディネータ): 挨拶
10:10	中村 衛 (FSUR), Numerical simulation of the observed strain field in the south Ryukyu region
10:40	谷川 亘 (JAMSTEC), Transport properties and its implication of pore pressure change due to frictional heating during 1999 Taiwan Chi-Chi earthquake
11:10	加納靖之 (DPRI), Heat Signature on the Chelungpu Fault Associated with the 1999 Chi-Chi, Taiwan Earthquake
11:40	LAI W.-C. (DPRC), The study of seismic-induced groundwater level changes in porous sediment and sedimentary rock
12:15	写真撮影会 (第7事業所1階ロビー)
12:30	Lunch Meeting
14:00	LU C.-W. (NKFUST), Explanation for pore water pressure build-up process of sandy deposits due to seismic excitement using a numerical tool
14:30	浅井康広 (TRIES), Trigger and Mechanism of Co-seismic Groundwater Level Changes
15:00	LEE T.-Y. (LUT), Comparison of Several Anomaly Detection Methods on the Seismic Groundwater Level Series
15:30	休憩
16:00	風早康平 (GSJ), Upwelling of volatiles from the mantle and the subsiding slab through faults and tectonic lines at Kinki district, Japan.
16:30	角森史昭 (LECUT), Spike-like Emission of Methane from Groundwater at Omaezaki 500m Well
17:00	小泉尚嗣 (GSJ), Long-term groundwater level changes on the focal region of the 1999 Chi-Chi earthquake, Taiwan
17:30	議論
18:10	懇親会

DPRC Disaster Prevention Research Center, National Cheng-Kung University  
DPRI 京都大学防災研究所  
FSUR 琉球大学理学部  
GSJ 産総研地質調査総合センター  
JAMSTEC 海洋研究開発機構

LECUT 東京大学地殻化学実験施設  
LUT Leader University, Taiwan  
NKFUST National Kaohsiung First University of Science and Technology  
TRIES 東濃地震科学研究所



写真1：産総研地質標本館前での記念写真。

あっても、地震の発生メカニズム解明に貢献できるような研究にもトライしていく必要があるだろう。

#### 4. 終わりに

本ワークショップの講演論文集は、過去4回分の論文集（地質調査総合センター研究資料集の384, 403, 420, 441号）と同様に、[http://www.gsj.jp/GDB/openfile/index\\_j.html](http://www.gsj.jp/GDB/openfile/index_j.html) からダウンロードできるようにする予定である。

#### 参考文献

小泉尚嗣（2005），地震学会ニュースレター，17，4，8-9.



写真2：ワークショップの風景。

## 第1回「震災対策技術展 / 自然災害対策技術展」宮城でのブース出展報告

下川 浩一（地質調査情報センター）

震災対策技術展は、震災対策に焦点を当てた世界でも唯一の展示会として、平成9年から毎年1月下旬～2月上旬に、神戸会場と横浜会場で開催されてきた展示会です（<http://www.exhibitiontech.com/etec/>）。今回は、東北で最初の上記展として、宮城県沖地震対策研究協議会と第1回「震災対策技術展 / 自然災害対策技術展」宮城実行委員会の主催により2006年10月4日～5日に、仙台市の東端にある仙台港近くのみやぎ産業交流センター（夢メッセ MIYAGI）において開催されました。4日には、宮城県沖地震対策研究協議会の長谷川会長（東北大学教授）や東北地方整備局長などの来賓を迎えての開会式が開かれました（写真1）。来場者数は4日が1,557名、5日が1,956名の2日間で合計3,513名（事務局発表）でした。会場が仙台の中心部からかなり離れていることを考えると、本展示会への関心は非常に高かったと思われまます。

本技術展は、国や地方公共団体の防災及び建築関連部署・機関、教育機関、一般企業の施設・防災担当者、防災関係NPO法人等を対象に、展示会やセミナー、シンポジウムを行うことにより、震災・災害への備え、震災・災害直後の緊急対応力、及び救援・復旧活動などに関する最新情報を提供するものです。地震調査研究推進本部により公表されている将来の宮城県沖地震の発生確率が非常に高いこともあって、耐震補強や転倒防止器具関連の展示に関心が集まっており、また、緊急対応の移動通信や非常用備品等の生活に密着した展示も多く見られました。さらに、同時開催された震災対策講演会やシンポジウムでは、「緊急地震速報と安否確認」や「最新の技術を用いた地震防災～迫り来る宮城県沖地震に備え

て～」など、実践的な防災対策に関する講演が人気を集めていました。

産総研地質調査総合センターでは、地質調査総合センターの紹介とともに、「仙台平野の津波堆積物調査の成



写真1：第1回「震災対策技術展 / 自然災害対策技術展」宮城の開会式の様子。

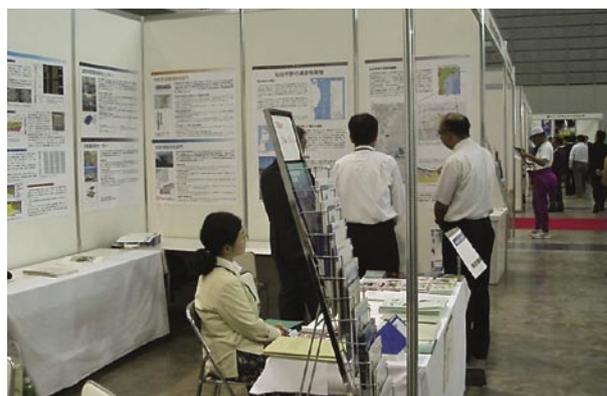


写真2：仙台会場における地質調査総合センターの展示ブース。

果」と「地震時の地盤災害調査とその予測」の、2つのテーマに関するポスターを展示しました。前者の展示では、仙台・石巻平野の沿岸部で津波堆積物調査を行った結果、平安時代に編纂された日本三代実録に記述されている西暦869年の仙台平野を襲った巨大津波が、現在の海岸から3～4km以上内陸まで遡上したことが明らかになったことを説明しました。今後、このような巨大地震が引き起こすと考えられる津波に対する防災対策を考慮しておく必要があります。後者では、3年前の2003年宮城県沖の地震(5月26日)及び宮城県北部の地震(7月26日)によって、宮城県鳴瀬町の田園地帯で広範囲に発生した噴砂は、堤間の湿地だけでなく、通常液状化が発生しにくいとされた浜堤上にも広く分布しており、

現地で地上型3Dレーザースキャナー測量、電気探査、ボーリングやジオスライサーによる試料採取など、様々な調査を実施した結果、海浜砂層であっても、砂採取と埋め戻しの影響で容易に液状化することが明らかになったことを解説しました。今後、このような土地改良・改変の場所、時期、及び改変内容等を精査し、個々に液状化強度を検討することによって、液状化被害を受けやすい場所を予測し、効果的な液状化防止対策が可能になると考えられます。

また、展示ブースで来場者に地質調査総合センター及び関連ユニットのパンフレットを配布するとともに、東北地方や地元の地質図などの展示販売も行い、成果の公表と情報発信に努めました(写真2)。

## 地質調査総合センター第6回シンポジウム「地質情報の社会貢献を考える」

### 伊藤 忍(地質調査情報センター)

2006年11月14日、秋葉原コンベンションホールにおいて、地質調査総合センター第6回シンポジウムが開催され、約100名の参加者がありました。今回のテーマは「地質情報の社会貢献を考える」です。私自身は地震学が専門で、地質学には疎く、地質調査所入所以来、払い出してもらった図幅は5枚程度しかありません。学術的な目的以外で、地質情報がどのように利用されているか、ほとんど知りませんし、気にすることさえありませんでした。

そんな私にとって、全国地質調査業協会連合会の佐橋義仁氏の講演「コスト構造改革下での地質調査の役割—全地連『地質リスクWG』の活動報告—」は、とても理解しやすく印象深いものでした。従来の工事のための地質調査では、楽観的リスク、すなわちリスクがないという状態が出発点でした。リスクが明らかになりつつある段階で地質調査をすすめ、結果的に工期が延びること、コストが増大することを意味していました。佐橋氏の提案は、構想段階で悲観的リスク、すなわちあらゆる角度からリスクを体系的に抽出しておいて、地質調査に投入する金額とリスク低減額とを比較しつつ工事をすすめるというものです。この提案は、リスクやその低減の金額への換算(計量化)などを行う必要がありますが、なかなか簡単ではないと思われます。全地連では、そのためのデータ収集を行っており、協力を呼びかけていました。

(株)建設技術研究所の尾園修治郎氏の講演「建設コンサルタントの地質情報活用」も興味深いものでした(写真1)。トンネル掘削前に予想されていた地質断面図をもとに工期や経費を見積もったものの、実際に掘削して

みたところ、予想とは大きく異なって破碎帯が非常に多く、結果的に赤字になってしまった例が示されていました。なぜ予想されていた断面図が大きく間違っていたのか、門外漢の私にはよくわかりませんが、地質情報の重



写真1: スライドの説明をする尾園修治郎氏。



写真2: 大盛況のデータベース展示発表。

要性について大変よく理解できました。

データベースの展示発表の時間は、事務局としての仕事に忙殺され、あまりよく見ることができませんでし

たが、会場が大変盛況であったのは大変うれしく思いました（写真2）。

## 「人類と社会の未来をつなぐ地質時代－日本の第四紀研究 50 年－」 地質標本館 2006 年度秋季特別展を開催して

兼子 尚知・水野 清秀・山口 正秋（地質情報研究部門）

2006 年 10 月 3 日（火）から 11 月 12 日（日）にかけて、地質標本館 2006 年度秋季特別展「人類と社会の未来をつなぐ地質時代－日本の第四紀研究 50 年－」が、地質標本館ホールにおいて開催されました。この特別展は、産総研における第四紀に関する最新の研究成果を、一般の方々にわかりやすく発信することを目的として企画されたものです。さらに、創立 50 周年を迎えた日本第四紀学会からの要望を受けて、その活動を紹介するコーナーを設けました。このような経緯で、今回の特別展は日本第四紀学会の協賛をいただくこととなり、学会のご協力を得て、地質調査総合センターではカバーしていない考古学の分野の展示も実現しました。

今回の展示では、「第四紀学」とその研究について、地質調査総合センターが主体的に行った研究の紹介、旧石器時代の人類の移動に関する研究、そして第四紀学会の活動紹介など 14 のテーマのパネルを地質標本館ロビーに展開しました。また、千葉県袖ヶ浦市で発掘されたカメ・シカ・ゾウなどの化石標本や、地質標本館からほど近い花室川周辺で発見されたナウマンゾウ化石や石器、第四紀学会の出版物や資料も展示しました（写真1）。

特別展の期間中、10 月 14 日（土）には、地質標本館普及講演会を催しました。午前は石器の製作実演を、午後は二題の講演を行いました。

展示したパネルのデータを A4 版で 26 ページの冊子として、来館した方々や日本第四紀学会会員のみなさまに無料で配付しました（写真2）。手元に置いておくことによって研究の成果概要をいつでも参照することができるため、これはたいへん好評をいただいています。この冊子は、地質調査総合センター研究資料集 No.445 として登録されています。パネルの画像データは、地質標本館の WebPage でも公開しています。

[http://www.gsj.jp/Muse/eve\\_care/2006/2006yonki/yonki.html](http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/2006yonki/yonki.html)

今回の特別展は、日本第四紀学会の協賛を得て、とくに考古学分野の展示・講演が行われたことが特筆に値します。第四紀学は、第四紀における自然と人類の歴史を探求し、自然と人類の関係を理解しながら、地球環境と人類の未来について考える学問と言えますが、地質調査

総合センターではカバーしていない考古学分野との交流を得られたことは、今後の研究活動により刺激を与えるものだと思います。地球温暖化や大地震とその影響など、近未来に起こる事象を推定するために、第四紀学の果たす役割は今後ますます重要になっていくといえるでしょう。

最後になりましたが、この特別展の展示のために研究成果をわかりやすく解説してくださった出展者のみなさまはじめ、第四紀学会事務局のみなさま、展示に協力していただいた多くの方々にお礼申し上げます。



写真1：展示の様子。

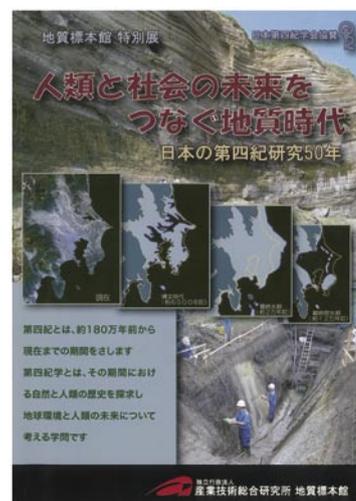


写真2：特別展の期間中に配布されたパンフレット（表紙）。

## 第3回自治体一産総研地質地盤情報連絡会開催

伊藤 忍（地質調査情報センター）

2006年10月20日（金）に埼玉県北埼玉郡騎西町きさいまちの環境科学国際センターにおいて、第3回自治体一産総研地質地盤情報連絡会が開催されました。同センターには展示館が併設されていて、出席者の多くは会の始まる前に展示館を見学されていました。残念ながら筆者は会の準備に追われ、ほとんど見ることはできませんでした。

古宇田亮一産学官連携コーディネータの開会挨拶、主催者挨拶に続き、前半の自治体関係者の発表が始まりました。埼玉県環境科学国際センターの八戸昭一氏による同センターの地質地盤情報データベースについての講演では、埼玉県内のボーリングデータ約11000本について柱状図をデータベース化していることが紹介されました。また、入力ミスに起因する位置情報に誤りがある場合や、そもそも標高データが存在しない場合があるなどの問題点があり、修正・推定する努力を継続していることが報告されました。次に、東京都土木技術センターの中山俊雄氏による同センターの現状についての講演がありました。同センターは今年の4月1日に東京都土木技術研究所から改組されたばかりです。この改組によって、従来の「研究室」が「調査係」などの名称に変更されたとのことです。技術支援活動や、そのための調査・開発、技術情報の蓄積・提供に重点がおかれるようになったとのことです。ニーズに対応することによって新たな研究テーマが生まれることもあるそうです。自治体関係者最後は、北海道立地質研究所の小澤 聡氏による同研究所のGIS情報公開についての講演でした（写真）。同研究所では、火山噴火履歴に関する既存の研究成果を

まとめ、インターフェイスを整えた上で「火山防災データマップ」として公開しているものです。非常に洗練されており、大変使い勝手の良いものになっていると感じました。この後、環境科学国際センターの見学が行われ、廃棄物処分に関する研究や、地下水に含まれる有害物質の簡便な測定法に関する研究が紹介されました。

後半に入り、産総研のWebGISについて地質情報研究部門の川畑大作氏の講演がありました。続いて事務局の下川浩一氏による地質地盤情報協議会の活動報告、古宇田コーディネータによる産業技術連携推進会議（産技連）の紹介とすすみ、この連絡会が産技連の分科会へと移行することが了承されました。最後に下川氏の挨拶で閉会となりました。



写真：北海道立地質研究所の小澤 聡氏による講演の様子。

## 地質標本館 2006年度野外観察会 笠間市周辺の岩石と鉱物－稲田花こう岩採石場と桂村の珪化木－（2006年10月28日）

久保 和也（地質情報研究部門）

地質標本館の入り口に奇妙な模様の入った花こう岩の板が展示されているのをご存知の方もおられると思います。これは甲府の花こう岩体からのものですが、最近稲田の花こう岩採石場からも興味深い模様の入った花こう岩が切り出されました。また、数年前にごぜんやま御前山周辺を地質調査した際、グリーンタフの沢から珪化木を見つけ、同時にその近くのゴルフ場で庭石状態の珪化木を沢山見かけました。標本館の野外観察会の案内を担当するに当たって、これらのことが記憶にあったので、今年度はこ

の2ヶ所に行くことにしました。

当日は曇り空ながら、週の初めからの雨模様からなんとか脱したことに安堵しながら8時半に集合、総勢18名（うち主催者側5名）で出掛けました。出発前に標本館前で花こう岩を観察し、バスの中で配布資料をもとに「花こう岩の模様から何が判りうるか」という話をしました。

1時間ほどで着いた花こう岩採石場では、まず（株）タカタの河野さんの案内で採石場を一巡しました。当日採石作業は休止していたので、バーナーで焼いて切断中

の岩盤に刻まれた深くてなめらかな切り口をのぞき込んだり、削りかすに相当するきれいな微粒子を手盛って、「なんで焼けこげてないんだらう？」といぶかしんだりしながら、各々自由に見て回ることが出来ました。次に、割り出した花こう岩を集積してある所に移動し、模様のある花こう岩を探しました。いくつかあるなかに、1×1×5 m程の大きさのブロックで、そのすべての面に模様が出ていて、立体構造の復元が可能なものがありました。それは細長い風船を縦につなげたような形状で、見かけは全く違うけれども、標本館前の標本と本質的に同じものでした。

この後、採石場脇の(株)タカタの附属施設である「石の百年館」に寄り、稲田石に関する歴史的資料や世界の石材、県内の珍しい<sup>しろさとまち</sup>鉱物等を見学しました。

午後からは、城里町(旧桂村)のゴルフ場に向かいました。ここの駐車場脇の切り割りに、長さ7 m程の珪化木が火山礫凝灰岩中に半分埋もれた状態で横たわっています。露頭はこの1ヶ所だけですが、付近の芝生には珪化木が多数置いてあり、さわったりじっくり観察することが出来ます。これらはゴルフ場造成時にこの場所から掘り出されたとのことでした。大きなものは直径が1 m以上あり、断面は丸いのからかなり扁平なものまで様々です。ルーペを用いて、年輪やその隙間でキラキラしている水晶や黄鉄鉱を観察しました。

ここではハンマーを振るうわけにいかないの、ゴルフ場入り口の珪化木を積み上げて作った門を見学した後、近くの小川に移動し、河床の凝灰岩の露頭から珪化木を採集することにしました。こちらの珪化木の大きさは1 m前後から10数 cmまで様々でした。小さいものも単なる破片ではなく、ちゃんとした樹幹で樹皮が取り巻いていました。心配していた雨による増水もそれほどなく、おのおの思い思いのところに陣取り、ハンマーとタガネを使ってそれなりのものを収穫出来たようでした。ここの珪化木は余りツヤがない真っ黒な石ですが、事前に採集し、切断して研磨したものはそこそこの光沢がありました。同一地域でも珪化木の質は様々ですから、

よくさがせばこの地域からもきれいなガラス光沢のものが見つかるかも知れません。

また、この小川の上流にはジュラ紀付加帯の地層が広く分布し、かつてタングステンを採った高取鉱山も近くにあるので、河原のチャートや堆積岩の礫に混じって、鉱山からの鉱石や水晶・トパーズなどがいないか探しましたが、残念ながらそれらが見つかる前に帰る時間が来てしまいました。

5時少し前には産総研に帰着し、採ってきた花こう岩や珪化木をおのおのザックに詰め込んで、薄暗くなりかけたなかを解散となりました。



写真1: (株)タカタの稲田花こう岩採石場。



写真2: ゴルフ場の珪化木。ここの地中から掘り出されたもの。

## 地質地盤情報協議会第4回意見交換会

伊藤 忍(地質調査情報センター)

2006年11月13日、産総研丸の内サイトにおいて、地質地盤情報協議会第4回意見交換会が開催されました。今回は41名という多くの参加者があり、会場のテーブルが足りない程でした。栗本会長の趣旨説明に続いて、第二東京弁護士会の高木宏行弁護士による「ボーリング

情報における著作権や個人情報保護法との関係」の話がありました。こういう話を聞ける機会というのは少なく、また、弁護士から直接話を聞けるということで、今回、これほど多くの参加者があったのだと思われます。話の前半では著作権法における基本的事項の解説がなされま

した。新聞紙面などでも見かけるものですが、法の趣旨をわかりやすく話していただきました。これが後半の具体的事例への土台になるので、大変重要な話なのですが、早く結論に到達したいと思っている方にはやや辛い部分もあったのではないかと想像されます。後半は、ボーリング柱状図の著作物性について、類似の図面等の著作物性が争点となった裁判例を踏まえて、検討する視点を提供していただきました。「検討する視点を提供」というのは、何かはっきりしない表現ですが、現在までのところ判例がありませんので、「このように判断される可能性がある」というところまでしか言えないということです。質疑や総合討論では、「○○はどう判断されるのか」といった質問が多く出され、丁寧に回答していただきました。一部の質問に対しては、判例を探してみないと回

答できないということで回答を保留されました。保留されたものについては、後日、丁寧な回答を頂いております。私自身はこの連絡会に参加したのは初めてで、とても興味深い話を聞くことができたのですが、これまでに参加された方もこのような切り口での話題ははじめてということで興味深かったようです。次回は年明けに開催するという方向で調整中です。また、年度内にはシンポジウムの開催を検討していますので、ご興味のある方は是非ご参加ください。

## サイエンスカフェ裏話

小泉 尚嗣（地質情報研究部門）

2006年10月20日に、毎日新聞主催、産総研共催の「サイエンスカフェ」で講演(?)を行って来ました。詳細については、地質ニュース等で報告する予定です。以下は本番前後の状況と私の感想です。

研究者と市民が、リラックスした雰囲気の中で科学について語り合う「サイエンスカフェ」に「地下水観測による地震予知」について話題提供をしてくれないかと、地質標本館の青木館長に誘われたのは7月のことでした。一般の方を対象にして、同様な内容で、過去に何度か講演をしたことがあり、広報部や標本館のお役にたてるなら比較的気軽に引き受けました。

本番1週間前である10月13日に地質標本館で行われたリハーサルには、標本館の職員と広報部のメンバー数十名が参加し、せいぜい10名程度の参加であろうと思っていた私の度肝を抜きました。つまり、地質の専門家から一般の人に至るまでの聴衆を前にして話をしなくてはならなかったわけで、本番よりもこのときは緊張しました。予想通り、専門家たる標本館職員からも、一般人代表たる広報部メンバーからも講演内容に対して鋭い質問や指摘が出され、私は冷や汗をかきました。いただいた意見を参考に、手直しをすることを伝えました。しかし、広報部の若手メンバーは、さらに熱心で（あるいは私の講演内容に不安を抱いたのか）、「もう一度最終チェックをさせてください」といわれ、本番前日にこの若手メンバー3名を前にリハーサルをすることとなりました。研究発表前に2度もリハーサルをやったのは、学生時代を除けば初めての経験で、サイエンスカフェに対

する広報部の意気込みを知ることができました。

上記のリハーサルのおかげで、本番での講演内容や質疑応答について、参加者の方々には好評だったようです。私自身も手ごたえを感じました。気軽に引き受けた割には、いろいろと大変でしたが、サイエンスカフェに来られた一般の方だけでなく、標本館の職員の皆さんや広報部のメンバーと、自分の研究内容について議論できたことは私にとって大きな財産だと思います。今回のサイエンスカフェは産総研にとって初めての試みということですが、今後も引き続きこのような取り組みが続くことを願っています。



写真：サイエンスカフェの本番の様子。設定した質問に対して挙手で答えてもらっているところ。

## 久保田 蘭

(くぼた らん, 地質情報研究部門)

昨年度より行われている産総研独自の職員採用試験を受験し、2006年4月1日付で地質情報研究部門地球化学研究グループの一員として採用されました久保田蘭と申します。本年3月まで慶應義塾大学大学院修士課程に在籍し、学部生時代から継続して土壌に関する研究を行ってまいりました。特に修士課程では、地質学的にも植生学的にも特性をもつ八丈島を研究対象地域として、土壌中の元素の地球化学的挙動を明らかにするとともに、土壌-植生間の相互作用について研究を行いました。今後は土壌に関してだけでなく、広い視野をもって様々なことにチャレンジしていきたいと考えています。知識も経験も少なく、これから学ばなければならないことが山積していますが、GSJの一員として恥をかくことのないよう努力してまいりたいと考えておりますので、ご指導よろしくお願いたします。



## 及川 輝樹

(おいかわ てるき, 地質情報研究部門)

2006年4月1日付で地質情報研究部門火山活動研究グループに配属されました及川輝樹です。今まで手がけた研究は、中部地方の100~数十万年オーダの火山活動史を構築する研究、飛騨山脈などの火山活動が関与した山脈形成過程の研究、熱年代学やテフロクロノロジーなどを応用したテクトニクスの研究などで、主に火山地域の地質構造発達史を基にした研究を行ってきました。

地質情報部門では、火山地域の地質図の作成に携わります。今年度は、「熱海」図幅が担当です。火山に限らず、様々なことに興味をもっておりますので皆様と一緒に研究を進めていきたいと考えております。また、「地質」の普及にも、積極的に取り組みたいと考えていますので色々お声をかけてください。よろしくお願いたします。



写真説明：  
今年、年男です（成年です）。

## スケジュール

11月21日～ 2007年3月5日	地質標本館特別展示 地質情報展 2006 こうち 黒潮よせるふるさとの地質 (つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/kouchi2006/kouchi.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/kouchi2006/kouchi.html</a> )
12月15日	2006年度日本情報地質学会シンポジウム 「Web-GISによる公開情報活用とその促進環境」 (秋葉原, <a href="http://www.jsqi.org/symposium2006.html">http://www.jsqi.org/symposium2006.html</a> )
2007年 1月22日	国際惑星地球年 (IYPE) オープニングセレモニー (東京, <a href="http://www.gsj.jp/iype/">http://www.gsj.jp/iype/</a> )
1月30日	TXテクノロジー・ショーケース・イン・ツクバ2007 (つくば市, <a href="http://sat.zencom-inc.co.jp/showcase06/index.html">http://sat.zencom-inc.co.jp/showcase06/index.html</a> )
2月1～2日	第11回「震災対策技術展/自然災害対策技術展」横浜 (横浜, <a href="http://www.exhibitionontech.com/etec/">http://www.exhibitionontech.com/etec/</a> )
3月24日	第18回自分で作ろう!! 化石レプリカ (地質標本館) (つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/eve_care.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/eve_care.html</a> )

このニュースレターは、  
地質調査総合センターのホームページで  
バックナンバーを含めご覧になれます。

<http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

## 編集後記

伊藤 忍  
(地質調査情報センター)

地質情報研究部門から異動になって、早いもので2ヶ月が経とうとしています。異動前は二階の端の方の部屋にいて、エレベーターを利用することもなかったので、所内では顔を知らない人が多いことと思います。今回、はじめてGSJニュースレターの編集を担当することになりました。顔が広くないので、誰に原稿を依頼してよいのか戸惑いましたが、多くの方のご協力を得られて、どうにか発行にこぎつけました。せっかく地質調査情報センターにいるのですから、次回の編集担当までには少し顔を広げて、皆様に原稿を依頼したいと思っておりますので、その際にはよろしくお願いたします。

GSJ Newsletter No.26 2006/11

発行日：2006年 11月29日

発行：独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査総合センター

編集：独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査情報センター

栗本 史雄 (編集長)

伊藤 忍 (編集担当)

志摩 あかね (デザイン・レイアウト)

〒305-8567

茨城県つくば市東1-1-1 中央第7

TEL: 029-861-3687

Fax: 029-861-3672

ホームページ：<http://www.gsj.jp/>